

肘折通信 第九號

「共同浴場 上の湯」のこと

肘折温泉の元湯、総湯ともいわれる上の湯
その昔の姿を想像してみましょう。

開湯伝説の霊湯「上の湯」 **原初**の姿は古書に紹介されています。

～明徳二年(1391年)正月二日に至り、温泉宿屋の許可を受け開業するものあり、
当時は疵湯一箇所にして、その構造の如き極めて無造作にして、
溜池の如きもの周囲に丸木を縄にて結付け、屋根を葺くに草を以てし、しばらく雨を凌ぐに過ぎざりき～

その後、元屋敷や川向などに住み始めた人達も、江戸時代に上の湯、仙氣湯の周囲に移り住み、肘折の街が形成されていきます。

明治28年の書物に、上の湯の記載があります。

～疵湯鉾泉は村の内部上方に在り、肘折小学校の直下乃ち湯坐山の麓に湧き出づ、
浴池四槽あり、箕と傳いて冷水温湯と混入す、槽底よりも温湯と湧出す浴池、何れも広く、
第一第二の浴池は各々二間四方あり、槽底には切石と敷く。
第三第四の浴池は広さは前と同じきも底には切石を敷かず、然れども四槽共に清潔なり～

そして**明治30年**、
判明している最初の建替工事が行われます。
当時の地区惣代は**八鍬藤吉**(久兵衛)、
請負大工は**中島喜代吉**(勇蔵)
総工費 188 円(現在の 300 万円前後)
昔の写真でも見る立派な建物です。

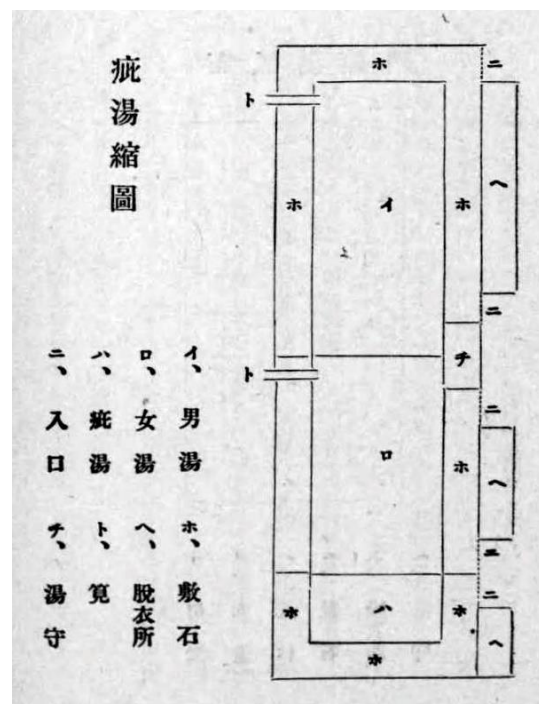


明治30年～大正末までの上の湯

当時の内部の図面も残っています。

この工事に至るにはドラマがありました。

～西村山郡の富豪、脚部に毒瘡を病んで痛み甚だし、
 醫者には「膝下より切断せざれば一命危うし」との事なりしが、
 何とか切断せず全癒せざるものにやと、東京の病院をいくつ廻りしにも同様の診察なりれば、やむなく帰郷し、肘折温泉への入浴を思い立ち、当地小松屋旅館(太兵衛)に投宿し入浴せしに、
 1週間程にて痛み薄らぎ、腫れも引きたり。
 これより浴すること九拾日にして、殆ど平癒したりしかば、
 大いに喜び、疵湯修繕の一部として金百円の寄付をなし、これより毎年肘折温泉に浴することとせり～



大正3年に書かれた上の湯内部図

建物面積 30 坪 東西 3 間 南北 10 間。男湯女湯の他、

感染の恐れのある痘瘡患者の為の浴槽(疵湯)もあったようです。

そして大正末期に外壁が横板になり、

昭和中期には屋根の形が変わります。

この辺の上の湯の姿は、

今も記憶に残る人が多いでしょう。



大正末～昭和初期

昭和中期

そして、明治～大正期にかけて、浴場に掲げられていたのが、

～肘折温泉入浴湯治法 五則～

- 一、初め三日間は一日三回、日毎に一回を増し、七回に至るを極度とす
- 一、入浴時間は二十分より少なからず、一時間より多からずを適度とす
- 一、入浴後、清水にて顔を洗ふべし
- 一、滞浴中は最も摂生に注意し、過度の飲食・過度の房事を慎むべし
- 一、飲食は滋養品を用い、且つ日日室内及び戶外にて適度の運動をなすべし

雰囲気は良いんですが、実行は厳禁ですね。